

今回の在外研究のテーマ「2000年以後のドイツ語圏の映画文化」について確認できた傾向等を以下で報告する。(例)として、とりわけ今回のドイツ滞在中に視聴した興味深い作品の内容やスタイル等も報告する。

1、ドイツ史、過去のドイツ

以前からドイツ語圏では歴史を扱う作品、とりわけナチ時代を扱う作品がきわめて多い。またドイツ再統一後は、東西分断の歴史、東独での人権抑圧、(壁崩壊)直前の東独の様子などを描く作品がコンスタントに撮られている。そのほか19世紀以前の社会、特に王侯貴族に注目する作品も人気が高く、数多く撮られてきた。

例：*Führer und der Vorführer* (2024, Joachim A. Lang) 1938年から45年までのヒトラー周辺の動向を、啓蒙宣伝大臣ゲッベルスの視点から描き出す。実際の映像や音声を効果的に使用して、第三帝国の隆盛から滅亡までをたくみに再現する意欲的な試みである。

2、異国の生活や風俗

外国を舞台とする映画が多いことが近年の傾向として確認できた。これには、ドイツ人が諸事情によって外国に行きさまざまな体験をする設定と、ドイツ人とは関係なく、外国で地元の人々が展開する物語が描かれる設定がある。前者では、ドイツ人が旅行に出たり結婚相手の国に行ったりして現地の文化習慣と衝突する様子を中心となり、後者ではヨーロッパで知られていない諸国の風景や生活様式を紹介することに重点が置かれる。また後者では、素朴な先住民が先進国の大企業に搾取されている現状を告発する作品が目につく。

例：*Checker Tobi und die Reise zu den fliegenden Flüssen* (2023, Johannes Honsel) 行動力のある青年、トービー。ある日、彼のもとに謎の箱が送られてくる。トービーは幼馴染の女性と一緒に、ベトナム、モンゴル、ブラジルを訪ね、謎を解く。その過程で、地球規模での大気汚染、南米での森林伐採の問題点などを子供にわかりやすいように提示する。

3、ドイツの異国人

ドイツは、1960年代から労働者としてトルコ人やギリシャ人を招いていた。その早い時期から、ドイツ語圏では民族多様性、異文化の衝突をテーマとする映画が撮られ続けているが、2000年以降は、シリア、アフガニスタン、ウクライナ、アフリカ諸国等からの亡命者を受け入れることが多くなり、登場する人々のルーツや抱える問題もきわめて多様化していることが目につく。つまり、以前は(異国人の映画)といえばトルコ人が主人公となることがほとんどであったが、いまではトルコ人は社会に溶け込み、この種の映画に登場することがなくなったという変化がみられる。パターンとしては、正式な居住資格を得られないまま不法滞在を続ける外国人が何らかの犯罪に巻き込まれるという展開が目につく。

例：*Sieger sein* (2024, Soleen Yusef) ベルリンの移民の多いヴェディング地区にある荒れた小学校。トルコ、アジア、アフリカ系の子供たちも多い。新しく加わったシリアからの避難民の少女が、最初はいじめられるが、やがて校内のサッカークラブに入って実力を発揮し、最後はベルリン市内のトーナメントで一位となる。素朴な教育的映画。

4、田園地帯の生活

ドイツ・オーストリアでは、ベルリンやミュンヘン、ウィーンなどの大都市を舞台とする映画が圧倒的に数多く撮られてきたが、あえて都会から離れた田園地帯を選び、社会の閉鎖性や人間関係の複雑さを描く作品も目につく。それらでは、田舎の暮らしを単純に美しく牧歌的に描かれるのではなく、田舎特有の人間関係、民主主義や一般的な正義感が通用しない閉鎖性が物語を動かす原動力となる。

例：*Andrea läßt sich scheiden* (2023, Josef Hader) オーストリアの片田舎の女性警官。元夫に復縁を迫られている。夜道で夫をひき殺してしまう。そのあと、元夫を轢いた教師が犯人とされる。主人公は教師と親しくなり、やがて良心の呵責に耐えられなくなって、すべてを告白する。

5、老人・高齢者の映画

社会の高齢化を反映して、老人を主人公とする映画、老人と子供あるいは若者の交流の映画が増えている傾向も確認できた。パートナーに認知症の症状が現れたために最期をどう迎えるかについて悩む老人の映画もいくつか撮られているほか、「老人」と呼ぶには少し早い感じの高齢者たちが自我が崩壊しそうになり、旅に出たり人生の目的を見つけようとしていたりするといった展開の作品も目立つようになっている。

例：*Weißt Du noch?* (2023, Rainer Kaufmann) 結婚から50年を迎えた仲のいい老夫婦。ふたりは昔のことがよく思い出せない。知人の医師が、あらゆる記憶がよみがえる薬を彼らに与える。美しい記憶もよみがえるが、他方で忘れてしまいたかった不快な記憶も復活し、ふたりの関係にひびが入る。典型的な〈高齢カップルの映画〉。

6、弱者・重病人・障がい者の映画

障害者、依存症患者、失業者、極端な貧困層等の人々が増加していることはドイツでも大きな問題としてとらえられており、そうした人物を主人公に据えた作品も着実に撮られている。とりわけ多いのは〈ルーザー（敗北者）〉の映画である。〈ルーザーの映画〉とは、長期間にわたって失業しており、しかし職につく意欲もなく、家族生活も破綻し、多くはアルコール依存症であるような人物を主人公とする作品のことだ。また、〈精神を病んでいる人〉の映画では、正式に〈病気〉と認定されているわけではない普通の人物が、ストレスの多い状態に置かれているうちに暴走してしまうような展開が多いことがいかにも現代的だ。また、死を控えた人々が自暴自棄になって親きょうだいなどに復讐しようとする物語や、安楽死を望む者が、大切な家族に見守られて施設に行くまでを描く作品などもある。

例：*Wochenendebellen* (2023, Marc Rothemund) 自閉症の小学生男児。学校でも家庭でもしばしば周囲を混乱に陥れ、大人たちも愛情を注ぎつつ途方に暮れている。少年がサッカーのスタジアムに関心を抱くようになったことから、父は息子を週末ごとにドイツ中のサッカーの試合を訪れ、少年はそのことに大きな喜びを見出す。

7、学校生活、アカハラ、父母の暴走

ドイツでは1960年以来、大きく教育が改革され、学校では教師たちは友人であるかのように子供に接するようになった。その結果、子供たちと親たちやそういった構図になれば、

教師および学校に対してモンスタークレーマーとしてふるまうという傾向も顕在化した（教師たちはそれにさからえない。下手をすれば教師の地位を失う）。このような状況を背景として、近年では学校を舞台に、小さなきっかけから生徒および親と教師との対立が起こり、破滅的な事態に至るといった展開の物語がよく撮られている。

他方で、大学においてはまだまだ教授たちが大学院生の運命を握っているという側面があり、権威を振りかざす教授を描く映画、逆に教授を罠にかけてアカハラ、セクハラを訴えて教授を社会的に抹殺しようとする学生の物語なども目につく。

例：*Eingeschlossene Gesellschaft* (2022, Sönke Wortmann) わずかな点数が足りなかったために大学入学資格を得られなかった少年。その父が銃を持って放課後の教員室に現れ、息子に合格点を与えるように要求し、教員たちをとじこめる。やがて六人の教員がすべてかなりの問題教師であることが明らかになる。警察は最初、いたずらと考えて出動しないが、最後にドアをぶち破って教員らを解放する。

8、喜劇、とりわけ恋愛喜劇

もっとも人気があり、高い興行収入をあげるのはコメディである。ほかのジャンルの作品にも喜劇的要素があるものは少なくないが、ここでは、明らかに最初からこれはコメディとして製作しようという姿勢で撮られた作品を視野に収めたい。

男女の恋愛をテーマとするものが多いが、個人的な苦悩を中心に据えたり、魔術をテーマに据えたりといったように多彩なパターンが見られる。このところの世界的傾向として、男性も女性も悩みを抱え、ひとつの愛をめぐって〈本当の自分〉をさがし求めるという展開が多くなっている。また笑いを生むための道具として、スマホおよび SNS を使っている作品も目につく。マッチング・アプリ等での〈なりすまし〉やメール等の誤送信が大きな誤解を生むといったものであり、時代の変化に合わせて喜劇も変わってきたわけである。

例：*Liebeskummerer* (2024, Shrel Peleg) 〈失恋セラピー〉の事務所を経営する女性。彼女の仕事を揶揄する記事を書いたライターが、出版社に残る条件として、同事務所を好意的に取材することになる。やがてライターと女性は惹かれ合うようになり、職業的な壁を乗り越えて愛を確かめ合う。

9、児童・ファミリー向け映画

わが国では知られていないが、ドイツは世界でも屈指の〈児童向け映画〉製作大国であり、毎年夏を中心に、20～30本程度の作品が製作される。近年では高度なデジタル技術を駆使したアニメが撮られているほか、時代を反映する作品、古典的な児童向け映画のリメイクなどが多く撮られている。

例：*Max und die Wilde 7: Die Geister-Oma* (2024, Winfried Oelsner) 古城を使った老人ホームに、職員の母と住み込んでいる少年マックス。彼は三人の老人と仲がいい。老女ヴェラが幽霊の声が聞こえるといって怖がり、マックスらは原因をさぐる。マックスと親友ラウラの力で、〈幽霊の声〉はヴェラを追い出すための陰謀であることがわかった。老人ホームに楽しい日々が戻る。

10、記録映画

ドイツ語圏では1970年代から数多くの記録映画が撮られてきたが、その傾向は今日も続いている。以前は予算のない映画作家が工夫をして小規模な作品を撮ることが多かったが、近年ではデジタル技術によって高度な撮影・編集技術が可能となり、映画大学の学生が数人で撮ったようなフィルムでも、驚くほど高い質を持っているのが特徴的である。

例：*Bei uns heißt sie Hanka* (2024, Grit Lemke) ドイツ最東部にある、少数民族ソルビアの人々の生活を描く。彼らは「ソルビア語」を話し、伝統的な式典も大切にする。ナチ時代にはソルビア語の使用を禁止され、旧東独時代は石炭の露天掘りが進められて大勢の労働者が街に来て、ソルビア文化の継承が難しい時期もあった。誠実な記録映画作品。

11、そのほか 実験的手法など

実験的精神にあふれた作品、高度に芸術的で物語が把握不能な作品がまとまった数で撮られ、しかもそれらが一般映画館で上映されるのがドイツ語圏の特徴である。それらは多種多様なので傾向をまとめるのは難しいが、近年の映画運動として知られる〈ベルリン派〉の作家たちは製作ペースが落ちていることが見て取れた。

例：*Alle die du bist* (2024, Michael Fetter Nathansky) Kant

ブランデンブルクで育った女性主人公がケルンの石炭産業に就職。女性にとって愛する者たち、夫、同僚、母、子供たち、牛などが物語のなかでめまぐるしく変化し、彼女がどんな人生を生きているのかまったくわからなくなる。

12、今後の展望・教育活動への反映

来年度以降も、特定個人研究費による出張を重ね、ドイツ語圏で撮られる映画についての観察と考察を続ける予定である。研究の成果は、論文として発表するほか、学部で担当している「映画史概論」「映像文化論」の講義内容として生かしたい。